太宰府の文化財 281

六弁の梅

朱雀3丁目

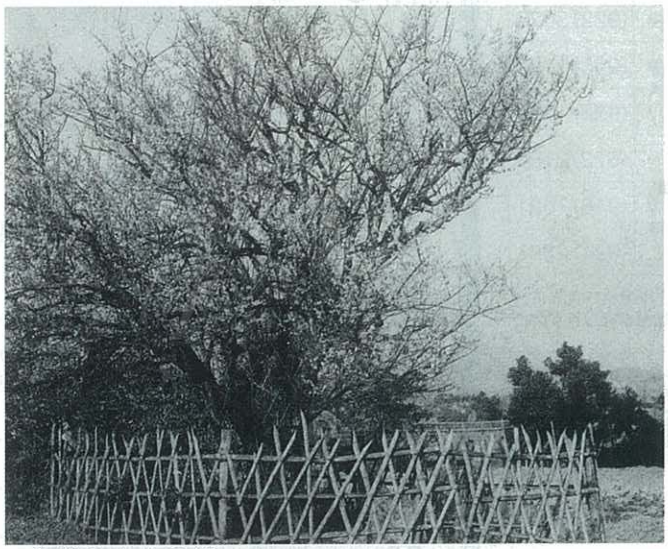
朱雀3丁目の丘陵上に納骨堂と隈麿の墓があります。その隈麿の墓の傍ら、クスノキに隠れるように小さな梅があります。これが六弁の梅です。

この梅については、明治時代の初めに記された『福岡縣地理全誌』で、隈麿墓の記述の中に「隈麿墓　村ノ西南一町餘。圃中二アリ。自然石ヲ立テリ。長七八尺許。梅樹アリ」とだけ記されています。毎年2月初旬頃に花が咲き、その中に六弁の花弁があることから「六弁の梅」と呼ぶようになったと考えられます。かなり大きな梅の木だったと言われ、戦前には一斗五升の梅の実が取れていて、区が入札を行って、区の収入にしていたといいます。六弁の花弁も数多く付けていたそうです。しかし、この梅の大木は、戦後になると樹勢に陰りが見え始め、昭和30年代後半には枯れてしまいました。

現在見ることのできる梅の木は、隈麿の墓のお世話をされていた菊武賢太郎さん・トリさん夫婦が、先代の大木が枯れたため、先代の六弁の梅の実から育てた若木を、植え直したものです。賢太郎さん亡き後現在もトリさんがお世話されていますが、最近は六弁の花弁が少なくなっていて、六弁を見つけることが難しくなったとのことでした。その大木だった頃の写真は、菊武さん夫婦もお持ちでなかったのですが、近所の力丸健次郎さん所蔵資料の中に、大木だった頃の六弁の梅の貴重な写真(絵はがき)が残されていました。これは父與八郎さんが生前、太宰府の文化財や景観を記録し整理されたもののひとつだそうです。

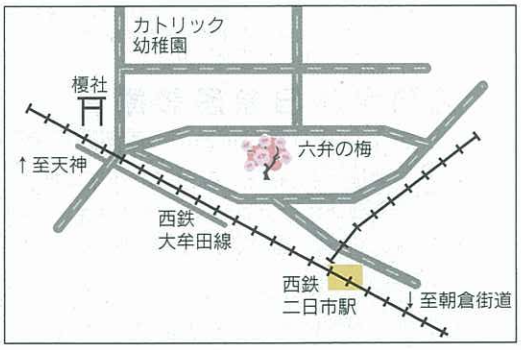
他にも多くの人々が、この梅に対する思いや思い出を持っています。菅原道真とともに悲運な人生を送った隈麿ですが、六弁の梅とともに地元の人々の様々な思いによって、見守られている現在は、幸せなのかもしれません。

文化財課　宮崎　亮一



▲先代の六弁の梅

▲現在の六弁の梅



編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　http://www.city.dazaifu.fukuoka.jp

この広報紙は、再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 282

宝満山の中世石塔

太宰府天満宮の周辺には中世や近世の石塔が点在しています。石塔は神仏への礼拝や奉納、墓碑、先祖供養、生前におこなう自分への供養など、さまざまな信仰の証として後の時代に形を残そうとした先人の想いが込められています。このような背景で特に古い寺社の周辺には数多くの石塔が多く見られ、それを調べることで知られていない新たな歴史が掘り起こされることがあります。

ここに紹介するものは、天満宮周辺の中世石塔の中でも非常に特異なもので、蝶足（ちょうそく）という飾りのついた台の上に四天王を彫り出した部分があります。その上に舞台のような高欄（手すりとそれを受ける柱）の付いた台に八角形の壷の形をした塔身があり、その正面には如来仏が胡坐（あぐら）を組んで蓮華の上に座っている姿が彫られています。さらにその壷の上には多角形の笠が乗り、頂部にはお饅頭のような飾りが付けられています。造りとしては一つの石から彫り出された一体のもので高さが約50センチ、幅約25センチを測ります。石材はこの辺りでは見かけないきめの細かな小豆色をした砂岩か凝灰岩で、多少劣化が進み欠損やひびが見られます。意匠からこの石塔は仏教世界を四天王が守る世界観が表現されていることが読み取れます。

特異なものとして紹介したのには少しわけがあります。このような形や意匠の石塔は全国でも九州でしか見つかっておらず、昭和30年代に鹿児島県の川辺町で発見されたものが「薩摩塔」と紹介されたことからその名が使われています。調べたところこれと似たものが鹿児島県坊津、長崎県平戸、佐賀県東脊振村、福岡県久山町白山、福岡市博多区堅粕、宇美町辻荒木などにもあるようで薩摩に限ったものではないようです。これらを見ると大変意匠が似ていること、石材が同じ可能性があることから商品として流通していた可能性が指摘されます。発見された場所には古代末から中世にかけて繁栄していた地域の拠点となる寺院や神社があった場所が多く、これら石塔に彫られた四天王の装束などが中国風であることから、近年では大陸貿易に係わって中国から輸入されて寺社に寄進されたものでないかという説もあるようです。

今回紹介する太宰府の石塔については故人の遺記によれば、この石塔は宝満の寺にあったものを天満宮社家の小野家が邸内に移設し、それを昭和初期に個人が譲り受けたものとされています。もとは大山寺（だいせんじ）や有智山寺（うちやまでら）と呼ばれた天台宗寺院のあった宝満山に建てられていたものとわかります。中世に地理的な関係から盛んだった大陸貿易によってはるばる波濤を越えてやってきた石塔が、今も大切に伝えられ太宰府らしさをかもし出しています。

文化財課　山村　信榮

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　http://www.city.dazaifu.fukuoka.jp

この広報紙は、再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 283

高尾山城跡-ひそかなる古城-

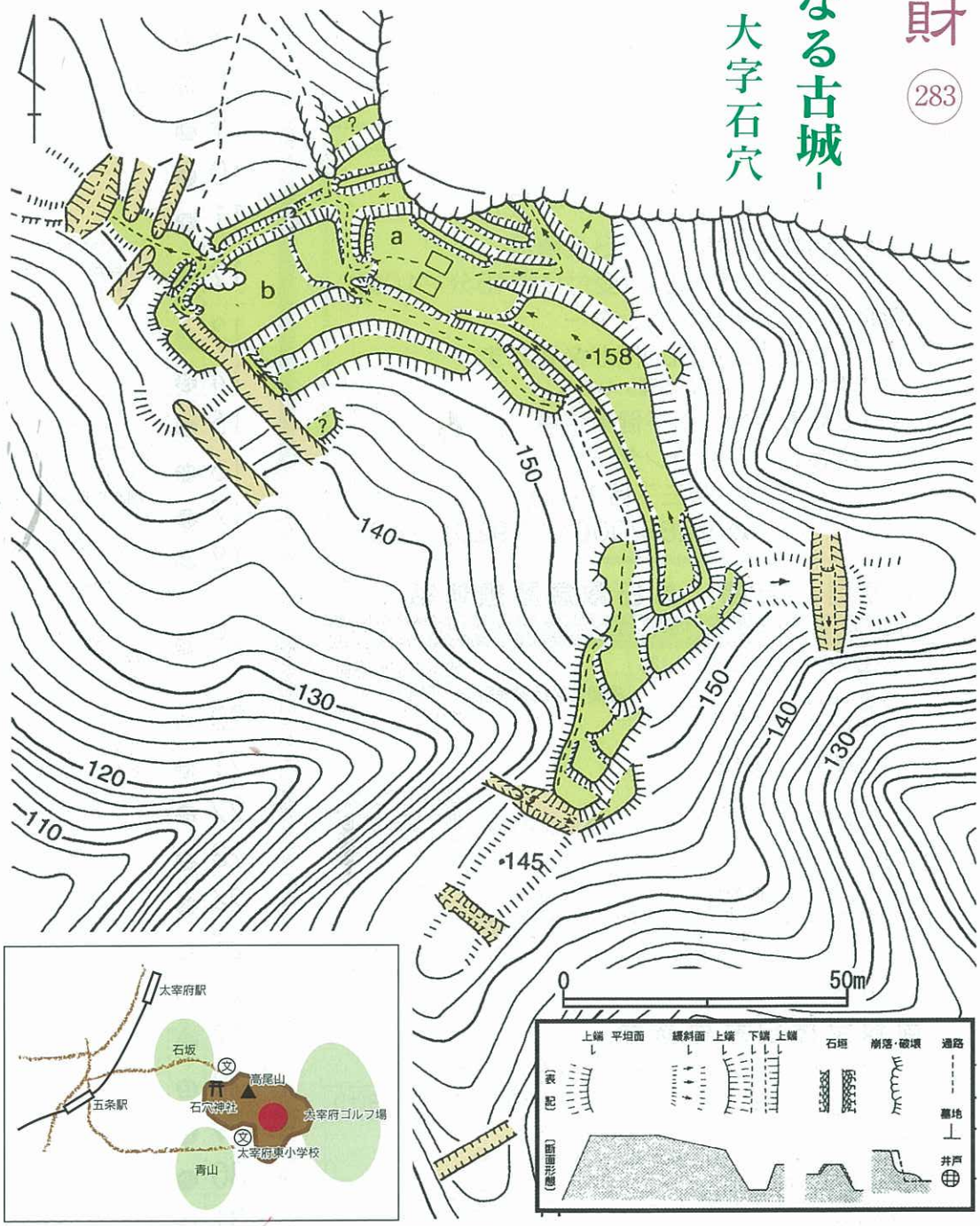
戦国時代　大字石穴

昭和40年代の高度経済成長期以来の開発の波は、市内の山地の風景を変えてしまいました。そんな中、市街地に近い場所に高尾山はあります。山麓の南には市環境美化センターや青山の住宅地、北側には筑紫女学園大学、北東から東側にかけては太宰府ゴルフ場がせまって、山頂付近だけがぽつんと残っている標高150mほどの低い山です。その山頂部から東へ続く尾根の最高部(太宰府東小学校の裏山)の標高158m地点周辺には、雑木林の中に奇妙な凹凸の連続を地表面で見つけることができます。この地形を図にあらわすと下のようになります。これこそが戦国時代の山城の跡です。

平坦地は土塁や横堀(黄緑色部分)によって守られ、これらはさらに尾根筋を切断する堀切(ほりきり)(黄土色部分)と呼ばれるものによって守られている様子がわかります。

この城は近世地誌や絵図から、天正14(1586)年、薩摩の島津氏が岩屋城を攻めるための陣として築城されたと考えられています。高い石垣や白亜の天守のない城跡は今も住宅街のとなりの山中に佇んでいるのです。

文化財課　下高　大輔



1999年11月21日　岡寺良氏　調査・作図に加筆・加色

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　http://www.city.dazaifu.fukuoka.jp

この広報紙は、再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 284

古代大宰府の都市性

正月の太宰府天満宮の賑わいは、多くの人々が訪れることで全国的に知られています。多くの人々が集う地「太宰府」は、その昔、『続日本紀』神護景雲3（769）年条に記された「大宰府言、此府人物殷繁、天下之一都会也…」の文章を以って評されてきました。この文章自体は、大宰府学校院における教育のための書物要求を願い出たことを記したものでしたが、この文章を引用し、大宰府の都市性が語られてきました。都市を規定する要素は、様々な視点から描き出すことができ、現在の都市基盤整備のように統一的な施設整備の痕跡や、様々なものが行き来した痕跡などから語られています。市内各所で行われている埋蔵文化財発掘調査の成果からも、統一的生活基盤整備の痕跡としての「条坊」痕跡や、中国・韓国からの多種多量の輸入陶磁器を素材として、大宰府の地が物流の中心であった痕跡として捉え、先の文章を立証するものとして語られてきました。また日常的に使用された食器にも多様な状況がみられ、大宰府管内であった筑後・豊前・豊後・肥後・薩摩・日向といった九州内でつくられたものをはじめ、都があった畿内地域のものも多く出土しています。特に筑後国で作られた食器は、大宰府が整備される直前、飛鳥時代から大宰府内各所で消費されていたことが分かり、広い範囲で出土しています。その多くは煮炊きに使う土師器製の甕で、出土している広がりを見ると、特産品というよりは、日常的な道具として持ち込まれたものと考えられます。筑後の国と大宰府の結びつきは、天平10（738）年に記された『筑後国正税帳』などの文書からも伺い知ることができ、筑後の人々が多く「太宰府」へ移り住んでいたことが分かります。このことは、「太宰府」に元来住んでいた人々とは異なる人たちが多く、それも継続的に住んでいたことを示す物証の一つといえます。これらから考えられることは、いわば「住所」から切り離された多様な人々の集合体としての大宰府を知ることができ、このことからも大宰府の都市性が語られることになります。しかし、この大宰府も、人々を集める原動力としての大宰府政庁の崩壊とともに求心力を急速に失い、太宰府天満宮周辺へと偏った有様を残すことになります。

現代の太宰府では昭和40年代以降、大規模開発によって団地が造られ、近年では土地区画整理事業による宅地化やマンション建設が進み、様々な地域で育った人々が住むようになってきました。都市化の一表現として、「縁無き人々」の集住が上げられますが、まさにここ数年で、太宰府は様々な人々が集住する都市的な空間として大きく変貌しつつあると言えます。

文化財課　中島恒次郎

▲大宰府で使われた多様な食器【平安時代中頃】

▲現代の太宰府と古代の大宰府

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　http://www.city.dazaifu.fukuoka.jp

この広報紙は、再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 285

将棋駒名を書いた木札

朱雀三丁目出土　平安時代後期

囲碁は古くから行われていたようですが、日本で将棋がはじまったことを確認できるのは、平安時代、11世紀中頃になってのことです。

平安時代の詩人、藤原明衡が天喜・康平年頃（1053～65）に書いたとされる随筆『新猿楽記』に、「尺八、囲碁、双六、将棋、弾碁」などと記すのが最古の文献とされ、奈良の興福寺境内の発掘調査で出土した11世紀中～後半の将棋駒が現在のところ最古の資料とされます。

12世紀になると、新古今和歌集を撰したことで有名な藤原定家の日記『明月記』など、いくつかの文献に将棋のことが書かれます。このころになると都から遠く離れた地方でも将棋が行われていたようで、東北の出羽国府（山形）や平泉の中尊寺（岩手）、但馬国府推定地の深田遺跡（兵庫県豊岡市）の発掘調査で駒が出土しています。国府や大寺院といった著名な遺跡で出土することから、貴族や僧侶の間で広まっていたと考えられています。

ここ太宰府でも、11世紀後期～12世紀初頭頃の将棋資料が、大宰府条坊跡のほぼ中心、西鉄操車場跡の発掘調査で出土しています。見つかったのは将棋の駒名を記した木片で、当時のごみ穴に枝葉とともに捨てられていました。

写真は、長さ8・9㎝、幅1・8㎝、厚さ0・15㎝の薄い板です。その両面に文字とみられる落書きが異なる筆使いで2～3回ほどなされており、表面にはその最後に木札の幅にあわせて「桂馬香車歩兵」の文字が、立派な楷書体で書かれています。「桂馬」のすぐ上は切断されていますが、ここにも「将」とみられる墨痕がみえ、「銀将」などの駒名が書かれていたようです。当時の駒は薄板を五角形に切ったものなので、駒にする予定だったのかもしれません。

このころの大宰府と将棋のかかわりを伝える貴族の日記があります。平安時代後期の公卿・歌人である源師時の日記『長秋記』には大治4（1129）年5月20日に、将棋の駒12枚を使った「覆物御占」という占いを鳥羽院が行ったことを記していますが、それは、方法を記した唐人自筆の書物とともに、「鎮西」つまり大宰府から伝学された、と述べています。

将棋のはじまりは謎につつまれていますが、大宰府でも早くから取り入れられていたことがうかがえます。

文化財課　井上　信正

▲将棋木札が出土した穴

▲裏面

▲将棋駒名を書いた木札

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　http://www.city.dazaifu.fukuoka.jp

この広報紙は、再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 286

愛嶽神社上宮

江戸時代　内山所在

愛嶽神社とは、太宰府市内から北東方向にある宝満山を見たときに、右手前の見える一段低い山、愛嶽山（標高432m）の山頂にある竈門神社の境外末社です。祭神は軻遇土神ですが、石鳥居の扁額には「飯綱大権現」にあるように、祭神は明治初年に軻遇土神に変わったようです。

ここはちょうど太宰府市と筑紫野市の境界に当たり、明治30年から内山区が管理しています。お祭りの神事は現在、竈門神社が取り仕切っています。

『筑前国続風土記』には伊豆奈権現として紹介されており、記事を見ると「是天竺の神、荼吉尼と称す。魔術を好む者この神をたうとうという」とあり、昔から山頂にあったのを黒田藩の久野外記が再興したと記しています。元々、上宮、外宮、神祇殿、参籠所があったとされていますが、現在ではきちんと残っているのは上宮のみです。

現在の境内には、石鳥居、赤鳥居3基、石垣、石灯籠、神祇殿、参籠所の跡地、そして奥まった箇所にある急な石階段を22段あがると小振りの石祠があります。

石祠の手前両脇には、比較的新しいものですが、修験道の開祖役行者と天狗の姿をした飯綱権現が並んでいます。その奥の石祠の中には特徴的な素焼きの人形が祭られています。僧形ながら甲冑をつけ、左手に宝珠、右手に錫杖を持って馬に乗っています。実はこの像は地蔵菩薩です。このような姿をした地蔵菩薩を特に、「勝軍（将軍）地蔵」と呼びます。鎌倉時代以降の地蔵信仰は、民間信仰を取り入れて変容し、地蔵が戦場で危急を助けてくれるという信仰から、我が国独特の形として発展したようです。（他説として道祖神との関係も指摘されています）宗教的な背景としては、飯綱権現と荼吉尼天は稲荷社を仲介して結びつきが生じており、天台宗系の修験道とも深い関係が指摘されています。このようなことから本来、この社は修験の祈祷に関係した場所だったと考えられます。ところが、実際の聞き取り調査からは、牛馬の守護神としての信仰が篤く、年2回の祭日（1月24日、7月24日）には近くの里から牛馬を曳いて多くの参拝者が訪れていたとのことです。戦後、農作業に牛や馬を使うことは激減したため、この社に訪れる人も少なくなってしまいました。

ここからは推論になりますが、中世以降広まった飯綱権現（荼吉尼天）信仰から江戸時代後期になると、同じく修験道を背景にも持つ愛宕信仰に変化したのではないでしょうか。愛宕の神は神仏習合時代には、勝軍地蔵を本地仏としており、現在でも、愛宕の縁日は地蔵と同じ毎月24日です。また現在の祭神はカグツチ（火産霊命）です。先ほどから説明してきた愛嶽神社上宮と共通する点が多いと思われます。市史聞き取り調査では、愛嶽神社で祭られていた飯綱権現は、福岡市西区の愛宕神社に移されたとの話もあるため、何らかの関係があったのは明らかです。また牛馬の神としての信仰は案外、上宮に鎮座する馬に乗った勝軍地蔵の姿を見た農民たちの素朴な信仰だったのかもしれません。

文化財課　高橋　学

▲石祠の中に鎖座する勝軍地蔵

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　http://www.city.dazaifu.fukuoka.jp

この広報紙は、再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 287

新指定された文化財

昨年11月28日に行われました太宰府市文化財専門委員会の答申を受けて、3月3日付けで、左記の4件が新たに太宰府市指定文化財に指定されました。太宰府市指定文化財は、これで合計10件となります。

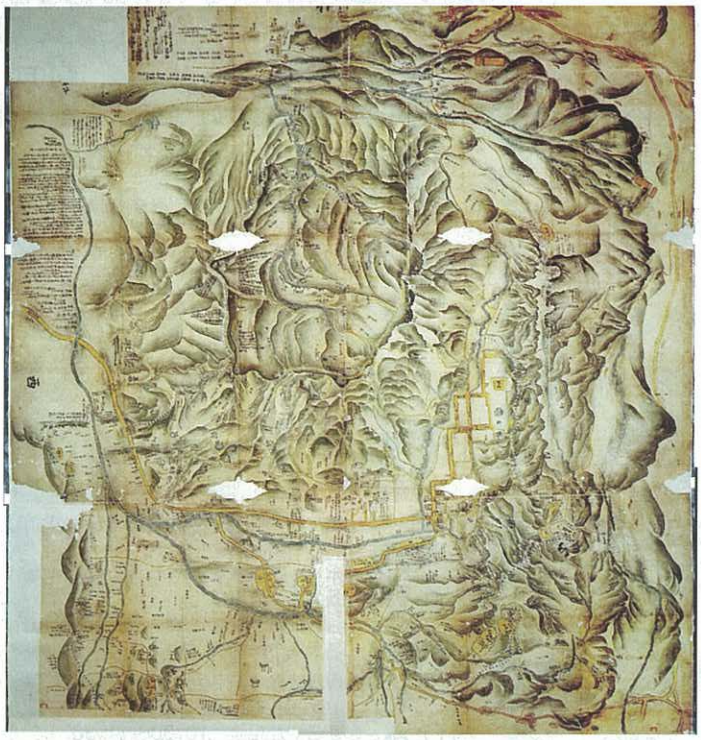
◎有形文化財（1件）

○大野城太宰府旧蹟全図北（おおのじょうだざいふきゅうせきぜんずきた）

所在地：宰府一丁目　個人蔵

法　量：縦143cm、横127cm

概　要：通称「太宰府旧蹟全図北図」と呼称される絵図で、文化3（1806）年に描かれたものと推定されます。大野城・大宰府跡などを図の中央に配し、礎石の遺存状況や故事来歴などの情報が詳細に記入され、近世だけでなく、古代・中世の太宰府を知る上で貴重な資料です。



◎天然記念物（3件）

○晴明井のエノキ（せいめいのいのえのき）

所在地：朱雀四丁目

数　量：1本

概　要：晴明の井戸の脇から斜めに生えている巨木で、高さは13・8m、幹周りは3・5m、根元付近の幹周りは4・8mを測ります。市内最大のエノキであり、ゴツゴツとした幹には巨木の風格が感じられます。平成18年の台風以後コンクリート柱によって支えられています。

○地禄神社のイチイガシ（ちろくじんじゃのいちいがし）

所在地：大佐野三丁目

数　量：1本

概　要：地禄神社境内にあるイチイガシで、樹高21・3m、幹周り3・3mを測ります。市内最大級のイチイガシであり、区画整理された大佐野地区に残る数少ない巨木として大変貴重です。秋になると真っ直ぐ伸びた幹の根元にはたくさんのどんぐりが落ちています。

○若宮神社の杜（わかみやじんじゃのもり）

所在地：国分四丁目

数　量：一叢

概　要：若宮神社は国分寺の北東に位置する石祠で、それを覆うように3本のムクノキの巨木が繁茂しています。その最大木は樹高18・3m、幹周4・8mを測り、市内最大であるとともに、福岡地方で最大級の大きさを誇ります。根元周囲に生育するネズミモチ、ヤブツバキなどの樹木も保護の対象となります。

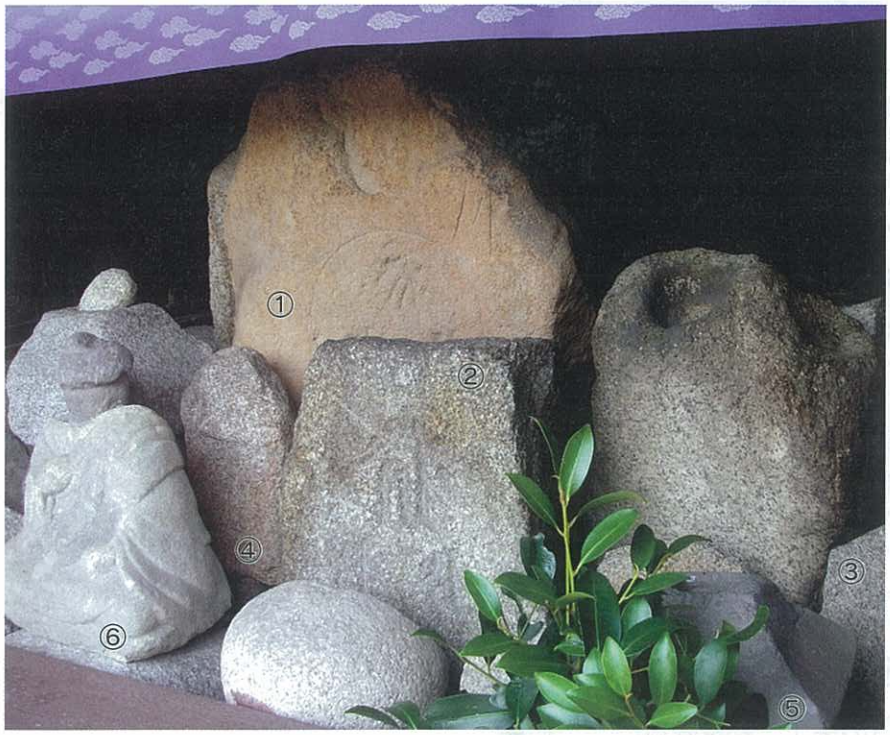
編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　http://www.city.dazaifu.fukuoka.jp

この広報紙は、再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 288

五条一丁目11番地の石造品

まち歩きをすると五条地区には、たくさんの石で作られた文化財が多く残されていることが分かります。その中で、今回ご紹介するのは五条一丁目11番地の祠の中に祀られている石造品です。



この祠は、地元の隣組で大事にお世話され、今に伝えられているもので、「オダイニッサマ」などと呼ばれていたそうで、本来は大日如来を信仰するための場所だったようです。

この辺りは昭和20年代頃までは大きな椋の木があり、「竹やね」と呼ばれた細い竹が密集して垣根のようになっていたそうです。言い伝えではここに「臨泉庵」という寺があったとされています。

祠の中には33個体以上の石造品が所狭しと並べられています。正面に幅55センチ、高さ95センチ以上の大きな泥岩や花崗岩製の板碑があり、梵字（古代インドの文字）で阿弥陀三尊が刻まれています（写真①②）。右側の花崗岩の方柱状の板碑（写真③）には、大日如来と思われる梵字が見られます。その他には三角形の頭を持つ板碑（写真④）、仏像を彫り込んだ板碑、五輪塔の残欠（写真⑤）、空海を彫った「お大師像（頭部は五輪塔の空風輪）」（写真⑥）、無縫塔など、様々な様式の石造品で満たされている状況です。大半は、16世紀頃までの中世後半のもののようですが、お大師像など江戸時代以降のものも見られます。昭和20年代以降に宅地化していく中で、周辺にあったものが少しずつ寄せられた結果、このような大所帯の寄せ場になったようです。

地元では、「この下には戦国時代の終わりに太宰府の四王寺山であった岩屋城の合戦（天正14年＝1586年）に参戦した武者の鎧が埋められている」という話が伝えられてきました。五条区で祀られている石造品の多くは、岩屋城の合戦で亡くなった人々の霊を弔うものとされているものが多く、これも代表的な事例といえます。石造品の中に無縫塔が含まれている点などから、本来は禅宗の寺院であった臨泉庵があったこととの関わりが強いものと考えられますが、それだけ岩屋城の合戦は、五条地区の住民にとってはかなり大きなダメージだったのでしょう。合戦での戦死者を弔う場所が日常の祈りの場を兼ね、地域の精神的な拠りどころとして大事にされてきました。

上に架けられた建物は、地元の指物師（家具などを造る職人）が腕をふるったものだそうです。近頃は春の縁日の行事も止み、供えてあった花立てや鐘が盗まれるなどして荒廃しつつあります。ぜひ、次の世代にまで残したい市民遺産の一つです。

文化財課　山村　信榮

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　http://www.city.dazaifu.fukuoka.jp

この広報紙は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 289

金掛けの梅

五条二丁目　室町時代

市内には、太宰府が持つ歴史性ゆえに、多くの物語が残されています。先に紹介した朝日地蔵にまつわる話のほかに、菅原道真を慕ってきた飛び梅の話は、よく知られたものです。今回紹介する「金掛けの梅」の話は、明治時代にまとめられた郷土史書にも記されており、早くから知られていました。今の五条交差点を基点として南東の角にある、大木茂る所に残る物語です。時は室町時代、戦乱に明け暮れていた世の話。明応の頃に起きた出来事で、応仁元年（1467年）に京都で端を発した応仁の乱の後、全国に広がった戦国時代に当たります。太宰府でも武藤少弐氏と周防大内氏の戦乱が繰り返され、明応七年（1498年）には、先に記した天満宮の飛び梅が、兵火のため枯死したが、詠歌により蘇生したという記録が残るなど、太宰府も戦火によって荒廃が進行していたことが想像できます。そのような中、五条に住んでいた古川家に起こった出来事が、「金掛けの梅」の物語として残されています。

物語は、戦乱で荒廃していた中に始まり、明応年間に大旱魃が世を襲います。天満宮周辺で、「六座」と呼称される自治組織的な商業集団を形成していた古川家が、大旱魃で困窮していた周辺の民に対し、私財を投じて救済へ乗り出します。しかし、これが元で家運傾き、衰退の一途を辿るようになってしまいます。滅亡の危機に瀕した古川家当主は、自らの庭に祀っていた天満天神に、家運再興を願います。「するとある夜に当主の枕下に白髪の老人が現れ、『黄金の嚢（ふくろ）を社前の梅の木に掛けておく』と云って立ち去った。朝目覚めた時、夢まぼろしかと疑ったが、庭の社前にある梅の木を見ると、あの白髪の老人が語ったように金の嚢が掛けてあった。一時は家運衰退を招き、お家断絶の危機に瀕した古川家は、この黄金を基礎に再興を果たすことができた」という物語です。

この時の「黄金の嚢」や庭に祀ってあった天満天神の「菅公自作の宇多天皇像」とされる宇多帝尊像が、古川家に伝えられています。この金掛けの梅の物語は、古川家に起こった出来事ですが、事はそれに終わらず、幕末に太宰府へ下向してきた五卿の一人、三条実美が金掛けの梅に寄せて詩歌を詠むなど、その後も物語が付加されてきます。現在は、金掛天神として敷地の東端に祀られており、古川家の御子孫によって手入れがなされています。ここに掲載した写真は、かつて祀られていた金掛天神社で、敷地の西側にありました。このように市内には、街の喧騒の中にひっそりと、物語を秘めたものが残されています。今、これらひっそりと残る文化遺産にも光を当て、太宰府を形づくるものを見つめ直す取り組みを行っています。7月下旬から文化ふれあい館で、今回取り上げた金掛けの梅の物語やその他の様々な文化遺産について展示を行います。ぜひご覧ください。

文化財課　中島　恒次郎

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　http://www.city.dazaifu.fukuoka.jp

この広報紙は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 290

宮ノ本遺跡買地券 ～9世紀～

大佐野4丁目

古代の都、平城京（奈良）・平安京（京都）では、墓地はまわりの山中にもうけられました。律令法典が都の中に墓を設けることを禁じていたためですが、ここ大宰府でも都と同じように、郊外の丘に墓がもうけられていました。

市域の西にある太宰府西小学校・西中学校一帯もその一つです。ここは、市内が一望できる小高い丘がつらなり、奈良～平安時代の墳墓が数多くみつかりました（宮ノ本遺跡・日焼遺跡）。当時貴重だった国内外の陶磁器類、東大寺正倉院伝来品と同じ文様構成の鏡（八稜鏡）、中国唐代後半の唐式鏡など、豊富な副葬品が知られています。当時墓に入ることができたのは一部の者で、もともとの住まい（本貫地）の近くに葬られることから、ここは大宰府に縁がある地元の有力な一族の墓地だったのでしょう。

この出土品でもっとも有名なものが、宮ノ本遺跡最初の調査で出土した買地券です。買地券は、死後の生活の場である墓地を手に入れたことを記す土地売買契約書です。

買地券を墳墓に入れるのは道教に由来するといわれ、中国では後漢代からみられ、韓国でも百済の武寧王（462―523年）の王陵から出土したものが有名です。日本では、墳墓に故人のことを記した墓誌を入れる例はいくつか知られていますが、買地券をおさめたものが発掘調査されたのはここが唯一です。

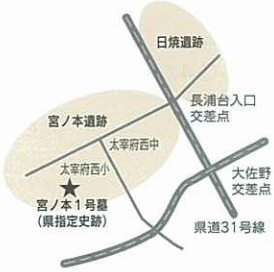
この買地券は、長さ35・2センチ、幅9.5センチ、厚さ2ミリの薄い鉛板に、6行135文字ほどが楷書で墨書されたと推測されています。被葬者の子とみられる「好雄」が、静寂な一丈四方のこの土地を、土地の先住者に対して銭二十五文と鍬・絹・調布・白綿で買い求めたこと、故人の霊の平安と子孫の繁栄を願ったことが記されています。

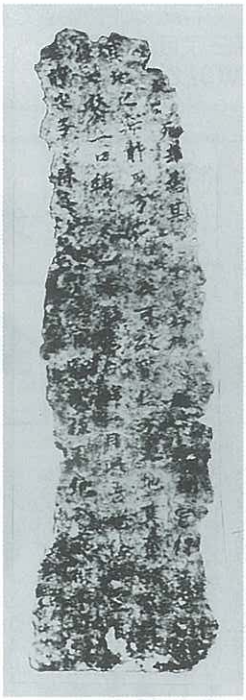
墓は9世紀ころの火葬墓で、南向きの斜面を平坦にならし、一辺約2mの方形に石をならべて0.5mほど盛土しています。買地券はその地下中央の穴から南を向いて立った状態で出土しました。木製の方形櫃の脇に立てられていたと推測されています。

大宰府を代表する遺物として九州国立博物館に展示され、また墓は福岡県指定史跡として太宰府西小学校内に保存されています。

文化財課　井上　信正

買地券が出土した宮ノ本1号墓（北から）





買地券　赤外線写真

買地券　出土状況

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　http://www.city.dazaifu.fukuoka.jp

この広報紙は再生紙を利用しています。